

# 『脳を創る読書』著者 酒井邦嘉に聞く

東京大准教授

## なぜ今、紙の本なのか



iPad、キンドル、リーダーと電子書籍のための端末が次々発売され、電子書籍が読書の中に浸透してきている。『脳を創る読書』（実業之日本社）の著者、酒井邦嘉・東京大大学院総合文化研究科准教授は「紙の本、の必要性を説く。真意を聞いた。

「脳を創る読書」は電子書籍の登場を背景に書かれたものですね。酒井 電子書籍や電子教科書が広がっています。が、何でもかんでも合理的で楽だから、安いし嵩ばらないからといって電子化すればいいのでしょうか。授業も電子教科書を利用し、レポートはメールで提出、教師もメー

ルで返事をするということが進んでいくと思われま。想像力を駆使して味わうという読書本来の目的に電子書籍が適しているのか、電子書籍が最適なメディアと言えるのかについての議論が必要だということ。なぜ今警鐘を鳴らすかというと、サイエンスとして脳にどのような特性があるのかを知らないまま「効率が良い」「無駄がない」と電子書籍に飛びついてしまうと、その過程で大切なものが破壊されるかもしれないから。過去を振り返ると、人間は科学技術によって工業化を推し進め便利な生活を手に入れましたが、その半面、土壌汚染、水質汚染、大気汚染といった公害を引き起こしました。公害病という健康に直接影響を及ぼす深刻な問題が生じて初めて、環境を考慮しなければならぬことに気づいたのです。電子書籍も便利な半面、我々の思考を蝕んだり、

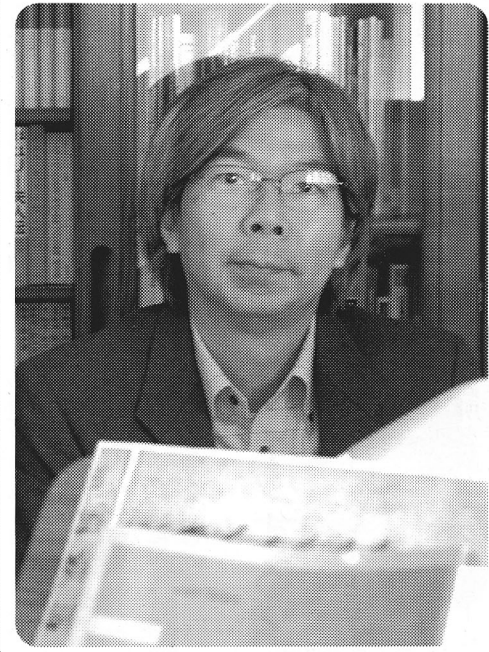
ストレスを与えたりする可能性を考える必要があります。考えることの喜びを忘れ、ひたすら情報に流されるだけということが支配的になつていくかもしれません。次世代を担う子供たちが、我々大人の知らないような思考法を身につけてし

### 子供の「本質を極める能力」

「脳の特長とはどのようなものですか。酒井 まず脳の重さは、人が生まれた時に成人の約3割、3歳になると8割くらいまでになります。3歳は一つのターニングポイント。あとの2割は10代のうちに完成します。10代、特に思春期の躰や教育は脳を作り込んでいくプロセスで最も大事な時期と言えます。このときに何をやっていたかで一生が決まると言ってもいいくらいです。だから私はこの時期の読書が脳に与える影響を重視するのです。大人の脳も進歩しないと

まうかもしれません。私が言う「脳を創る」とは、想像力を高めることです。想像力とは「自分の言葉で考える」という意味です。そんな想像力を高めるためには、まず脳の特長を知る必要があります。

いうことはありません。新しい仕事を覚えて、それをするのののしていく過程には、明らかに脳の柔軟性が必要とされます。芸術も同じです。例えば70歳を超えたピアニストが風格を備えた巨匠と呼ばれるようになったり、若いときにはなかったような味が出てくることがあります。「深みが増す」というわけです。これは年をとって、脳が老化したのではなく明らかに進歩した証拠と言えるでしょう。経験が積み重なることによつて、賢く判断できるようなにもなります。それも



脳が変化していくプロセスです。このように大人になつても脳が変化する余地は残されているのですが、一生から考えると割合は小さい。やはり、脳の変化が顕著なのは10代までです。子供と大人の脳は何が一番違うのですか。酒井 分かっていることは限られていますが、思春期くらいまで脳細胞は細胞分裂を繰り返して、物理的に増えています。細胞と細胞をつなぐ神経線維やシナプスも過剰なほど作られています。

この時期の子供は、大人が理性的に判断して行動には移さないようなことも見よう見まねで器用にやっつけてしまうことがあります。将棋や囲碁を考えると、幼少期から始めた子供と、大きくなつてから始めた大人とどちらが強いかといえ、まず子供です。大人は学校教育を受け、いろいろな失敗や成功を繰り返して物事の理解もよりあるはずなのに、なかなか定石が頭に入

### 本の厚みが与える量的感覚

「そのような脳の特長と電子書籍はどうか関係するのですか。酒井 与えられる情報量が少ないと、人間の脳は想像力で補おうとします。

説を読む方が映画よりも、我々受け手の想像する余地が残っているわけです。

例えば最も大衆的な情報伝達の方法に映画があり、セット、音声まであるのでより分かりやすく手取り早く情報を伝えることができます。テレビも同じです。しかし映像があると想像力の余地は限定されます。小

力に長けている一例です。この柔軟な10代の脳が育つていく過程で身についたものを軌道修正するのは、想像以上に難しい。感受性の豊かな10代に一切本を読まなければ、必要な想像力が身につかず、人の気持ちや身を全くと考えられない行動をして、取り返しのつかない結果を招くような恐れも考えられるのです。



## 電子書籍はプリントサインする??

して検索すれば膨大な情報にアクセスすることができ、読んでいる中で湧いた疑問をすぐに解消できます。これはとても便利なようですが、疑問について自

分の頭で考える前に調べてしまい、分かった気になつてしまう恐れがあります。ここでも読み手が想像力を駆使して補う過程が抜け落ちてしまふわけです。

紙の本が脳を創る仕組みを教えてください。

酒井 こんな経験がよくあるのではないのでしょうか。パソコンで原稿を書く。画面上で何回も推敲した原稿をプリントアウトして、紙

の上で文字が動くことはありません。要するに文字が動かないから、注意を向ける箇所を脳がコントロールできるので間違いを見つけやすいのです。

一冊の長編小説を読んでいるとき、「どの辺りを読んでいるか」と目星をつけたら、「まだたくさんページが残っているから二転三転あるかな」と想像力を働かせることができる。本の厚みが与える量的な感覚は読書にとって実は大切な要素なのですが、電子書籍の場合、そのような感覚はどうしても希薄になります。

一方、電子書籍で読書している時に分からない言葉が出てきたら、そのまますぐにインターネットに接続

コンピューター画面上では、長い文章になれば必ずスクロールして（表示部分を動かして）読むことになります。そうすると文字の場所が上に行ったり、下に行ったりと場所が変わり、位置情報が一定ではありません。紙の本であれば、紙

本の活字のフォント（書体）にはバリエーションがあります。漫画の吹き出しに、ピッタリのフォントもあれば、学術書や専門書にふさわしいフォントもある。フォントによって全く異なる印象を与えるわけです。「意味が伝わればいい」というのではなく、文章の雰囲気や合った書体を使い分けられることができます。表紙の厚さや紙のクオリティー、持ったときの質感、装丁に至るまであらゆることに情

報や情緒が込められる。著書にふさわしい装丁がなされ、読者が手に持ったときに内容にそぐわないという違和感を与えないようなデザインが求められています。つまり、フォントから印刷技術や紙、レイアウト、装丁といった全てが「紙の本」の見えない役者であり裏方なのです。そのようなものに支えられて一冊の本はできているのです。もし、ユニバーサルフォントで文字情報だけを電子書籍にしたとすれば、書かれたことがどのように伝わるのかは未知数です。少なくとも、想像力を掻き立てる要素は少なくなるでしょう。

私の本の中で「電子書籍はどこにサインをすればいいのだろう」と冗談で書きました。著者のサインをスキャンし本に載せてもその価値は限られています。目の前でサインをしてくれた本であればこそ脳にはさまざまな情報が深く刻まれるのです。「いつどこで書い

らるみ～男の輝き～

らるみ
検索
株式会社 力学

http://store.shopping.yahoo.co.jp/lalumi/index.html

てもらったサインなのか」という思い出は何年経つても恐らく忘れません。こうした一つ一つの読書体験が脳を創る大切なプロセスなのです。 本誌・山田文大

.....

さかい・くによし 1964年東京生まれ。東京大理学部物理学科卒業。97年から東京大大学院総合文化研究科准教授。2002年『言語の脳科学』（中公新書）で第56回毎日出版文化賞。専攻は言語脳科学。